

論文題目：メディアの表象と翻訳行為：ボスニア紛争報道に関する言語人類学的考察

英文題目：Media Representation and Translational Act: A Semiotic Anthropological Analysis on the Discursive Textualization of the “Bosnian Conflict”

提出機関：立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程

提出者：坪井睦子

指導教授：小山亘教授

提出年月：2011年6月

取得学位：博士（異文化コミュニケーション学）

英文要旨

With the end of the Cold War and the growth of information technology in the 1990s, translation-mediated communications have been expanding and diversifying ever more rapidly. Translational practice in the mass media plays an important role in this increasingly globalized world, which faces such problems as frequent ethnic conflicts that impact international politics and public opinion. Most people, however, are unaware of the fact that they are reading or listening to a text in translation. This is mainly because until quite recently media translation has been considered a neutral and objective activity where texts are simply transferred from one language into another and equivalence of meanings is easily achieved. Drawing on the event model of semiotic anthropology, the present study explores translational practice in media discourse as an interaction that occurs in a sociocultural and historical context. It does so by analyzing media representations of the Bosnian Conflict, a significant example of such discourse. The findings of the analysis show that media translation is a dynamic and multi-layered process resulting not only from a referential practice concerning “what is said” but also from a non-referential, social-indexical practice related to “what is done,” a practice that indexes the sociocultural power relations and identities of the language users—the communicative-event participants, such as the translators, journalists, and editors. With an attempt to revisit the core concept of “equivalence,” the basic idea that continues to underlie much of the work on translation, the paper articulates the cause of the persistent tension between equivalence and uncertainty, or between linguistic and cultural theories within the domain of translation studies, and suggests the possibility of applying contemporary linguistic anthropology to bridge the gap. Finally, it points to future directions in the role of media translation from the perspective of intercultural communication that seeks equality among different cultures and languages of the world.

TSUBOI, Mutsuko. “Media Representation and Translational Act: A Semiotic Anthropological Analysis on the Discursive Textualization of the “Bosnian Conflict,” *Interpreting and Translation Studies*, No.11, 2011. pages 229-233. ©by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

和文要旨

本研究は、メディア翻訳の相互行為性について、社会記号論系言語人類学の理論とその中核を成す「出来事モデル(event model)」に依拠し、ボスニア紛争報道という具体的事例分析を通して考究したものである。すなわち、メディアの表象に関わる翻訳実践が、社会・文化的コンテクストにおいて生起する言語行為であること、言い換えると、メディア翻訳が意味的「等価」に関わる言及指示的機能(referential function)の側面だけでなく、翻訳に関わる言語使用者たちの権力関係やイデオロギーを指標する社会指標的機能(social-indexical function)の側面をあわせ持つ動的かつ多層的な社会的実践であることを、言説分析を通し明らかにするものである。それによって、本論文は、人々が一般にメディア翻訳に対し抱いている等価的翻訳観を問い直すとともに、将来における多文化・多言語の平等と共存という異文化コミュニケーションの課題に対して、メディア翻訳の果たすべき役割と可能性を問うことを目的としている。同時に、本研究は、等価を再考することを通して、翻訳学における従来の等価をめぐる言語理論と、解釈の不確定性、個別性、一回性を根拠に等価理論に反論する近年の文化理論との間に横たわる溝に橋を架けるひとつの試みとして、翻訳学への現代言語人類学の応用可能性を提起するものである。

1990年代以降、冷戦構造の崩壊と情報通信技術の発展を背景にした急速なグローバル化によって情報が瞬時に国境を越える時代を迎え、翻訳を媒介とするコミュニケーションも拡大、多様化している。その意味で、翻訳が国際関係と異文化理解に果たす役割は以前にも増して重要となっている。メディア翻訳、中でも主に報道に関わる新聞、雑誌、テレビ、インターネットに代表されるマス・メディアの翻訳は、一方で冷戦後の新たな世界構築のための相互理解、他方で近年頻発する地域紛争や民族紛争の解決のための情報提供に大切な機能を担っている。このことは、政治、メディア、翻訳が相互に深い関わりを持つ営みであることを示すものである。メディアにおいて、紛争は常に関心の高い項目であり、報道としての価値も高い。それだけに、紛争が誰によって解釈されるのか、その過程でいかなる取捨選択がなされるのか、そして最終的にメディアを通し、どのようなテキストとなって国境を越えるのかは、人々の異文化理解、ひいては各国の外交政策や国際政治を左右する世論形成にも関わる。そして、そこには常に翻訳が介在している。本論文が具体的事例として取り上げるボスニア紛争は、冷戦終結後世界で多発した地域紛争の中でも、第2次世界大戦後ヨーロッパで起きた最悪の紛争だと言われている。ボスニア紛争をはじめとする一連の民族紛争で多民族共存のモデルと言われたユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国は分裂・崩壊に至った。この紛争について、日本の人々が受け取った報道も、その多くが欧米主要メディアの発信したニュースや記事の翻訳であった。

しかしながら、一般の視聴者や読者は、国際報道における翻訳の存在をほとんど意識していない。これは、翻訳という行為が、現在でも情報理論的コミュニケーションモデルに典型的に見られるような、2言語間の意味の等価的置き換えと見なされていることを物語る。そこには報道の客観性・中立性という規範も加わり、一層メディア翻訳の言語行為的側面が見えにくくなっている。情報理論的コミュニケーションモデルでは、メッセージは「脱コンテクスト化」された意味の体系であり、コミュニケーションに先行して送り手の中に存在するものと想定される。ここにおいては、「等価」という概念も、メッセージの言語的な「意味」の伝達と捉えられる。このようなコミュニケーション観は、メディア翻訳の受容者である視聴者や読者ばかりではなく、近年までメディア翻訳の実践や研究

に携わる人々の間でも支配的であった。その結果、翻訳学においてメディア翻訳の研究は他の領域、とりわけ文学をはじめとするフィクション領域の研究と比べて立ち遅れてきた。しかし、メディア翻訳も、コンテキストにおいて生起する言語実践である以上、語用(言語使用)としての特徴を有する。言語使用には、言語使用の場(コンテキスト)における言語使用者たちの権力関係やアイデンティティが反映される。このことは、言語使用が人間に共通する権利でありながら、同時に世界の人々の間で非常に不均衡な形で分配されている現状を鑑みると、言語使用を通して不平等な関係が作られ、維持されることを意味する(メイ, 2005)。ある出来事や行為の解釈に始まって報道テキストが生成され、各国語に翻訳される過程には、様々な文化・社会・歴史的背景を持つ言語使用者たちが複雑に絡んでいる。したがって、紛争等諸々の出来事を伝える報道と翻訳の姿は、従来のコミュニケーションモデルでは捉えきれないことは明らかである。社会記号論を基盤とする現代言語人類学を代表する Silverstein (1976) は、コミュニケーションを指標的な「出来事」と捉えて、言語行為を含むコミュニケーションには、何かについて「言われていること(what is said)」（言及指示的機能）だけでなく、コンテキスト依存性が極めて顕著な「為されていること(what is done)」（社会指標的機能・非言及指示的機能）という2つの側面があり、コミュニケーションの出来事とはこの両面を有する指標的出来事であるとして概念化を行った。これが出来事モデルである。本論文は、メディア翻訳の相互行為性を、この出来事モデルに依拠することによって検証・解明を試みたものである。

本論文は、大きく分けて前半部と後半部の2つの部分からなる。前半の第1章から第3章までが基礎的な理論的研究である。後半の第4章から第7章までが前半の理論的研究を基盤とした事例研究、すなわちボスニア紛争報道に関わる翻訳実践の分析研究である。第8章は結論部分である。まず、第1章で、上述した研究の目的、背景、意義について述べ、第2章では、この問題の背景として近代におけるグローバル化とメディア翻訳の関係性について考察した。考察を通し、グローバル化を背景とするメディア翻訳が、翻訳学で「翻訳」という語が通常意味する、言語間翻訳の過程だけでなく、ある出来事が解釈されて報道テキストとなる過程も含む一連の言語行為として捉え得ることを示した。さらに、メディア翻訳の不可視性(Bielsa, 2007)ゆえに、メディア翻訳には、従来の翻訳理論を越える記号論的視点が必要なことに論及した。第2章をうけ、第3章では翻訳学における理論の歴史的展開を振り返り、近年の翻訳学における2つの対立軸、すなわち、従来の等価をめぐる言語理論とその等価理論に疑問を投げかける文化理論との対立の背景とそれぞれの論点を明確にした。前述したように、語用には2つの側面、すなわち言及指示的機能と社会指標的機能の2つがあるが、翻訳学における等価の議論は、言語構造や言語使用の言及指示的側面に焦点化されることが多かった。その結果、語用の社会指標的側面が十分検証されてこなかった。文化理論から出される解釈の不確定性の議論は、この社会指標的側面の等価を達成することがいかに困難であるかを指摘しているのである。そしてこのことは、両者が対立するものではなく、相補的關係にあることを示唆するものである。ここにおいて、語用の2つの側面を射程に含む社会記号論系言語人類学の視座の有効性について論じ、この理論を本研究の理論的枠組みとすることの根拠を示した。その上で、その理論の中核である出来事モデル、及び「メタ語用(metapragmatics)」（Koyama, 1997; 小山, 2008; Silverstein, 1993）の概念について論じ、分析に必要な具体的なメタ語用の諸装置について概説した。

後半第4章から第7章まで、第3章で示した出来事モデルとメタ語用の装置を援用しながら、ボスニア紛争という具体的な出来事をめぐるメディア翻訳の実践を考察した。本論文の目的が言語人類学の出来事モデルに依拠し、紛争に関わるメディア翻訳の言語分析を行おうとする以上、ボスニア紛争がいかなる歴史・文化・社会的コンテクストにおいて生じた出来事であるのかを考察することは必須である。まず第4章で、ボスニア紛争というローカルな出来事の概略とその歴史的背景について述べた。続く第5章は、ローカルなボスニアを取り巻くヨーロッパや国際社会という、よりグローバルなコンテクストから紛争について論じた。その上で、第6章で、第7章の談話分析において起点テキストとなる欧米主要メディアの言説、すなわち日本を含め世界の報道の情報源として、また国際世論形成上で大きな影響力を持つ欧米主要メディアの言説について、語用の2側面、特に社会指標的側面を中心に分析した。現地における他の諸々の言説と対照させることを通し、現代世界というコンテクストにおける欧米メディア言説の位置づけを行った。そして第7章では、欧米主要メディアによって解釈・生成されたテキストを起点とし、日本のメディアによって日本語のテキストが生成される過程について、報道週刊誌 *Newsweek*、外交・国際専門誌 *Foreign Affairs*、ルポルタージュ *The Fall of Yugoslavia*、BBC テレビドキュメンタリー *The Death of Yugoslavia* という4つのタイプのテキスト及びその翻訳テキストを対象として言語間翻訳の実践について分析を行った。

その結果、以下のことが明らかとなった。まず、ボスニア紛争が、旧ユーゴスラヴィア諸民族の辿った歴史や文化・社会的コンテクストを背景とするものであることはもちろんだが、この紛争が、近代ナショナリズム、国民国家、民族自決等、近代西欧の価値・信念・イデオロギーという象徴的な価値体系の中で生じたものであり、欧米だけでなく日本を含む国際社会の対応も、このような近代の価値体系の反映であったことである。さらに、国際社会の世論に大きな影響力を持つ欧米主要メディアの言説もまた、近代西欧のイデオロギーを前提として指標するものであり、そこでは「西洋」対「東洋」、「文明」対「野蛮」というフレームが様々な形で喚起されていた。現地の言説には、ミクロなレベルでは社会文化的多様性が観察されたが、この多様性はマクロなレベルでは、近代西欧のイデオロギーや価値によって抑圧され背景化し、主要メディアの大きな力の影で国際的にはほとんど影響力を持たないまま埋没していった。その一方で、欧米主要メディアの言説が世界に流布していった。その過程のひとつが日本語への翻訳という実践である。4つのタイプのメディア翻訳を対象とした分析を通し、日本におけるメディア翻訳の実践が、ミクロなレベルでは、翻訳に関わる翻訳者(編集者・ジャーナリスト)を取り巻く日本のジャーナリズムやメディアのあり方に影響を受けつつ、他方で欧米メディアの既存言説や起点テキストのコ・テキストを所与のものとして前提としていることが観察された。このことは、日本のメディアが欧米メディアの言説を「事実」として一方的に受けとる傾向を示しており、両者の力関係を表すものでもある。一方マクロなレベルでは近代日本という歴史・文化・社会的コンテクスト、そしてその日本の近代の価値観を規定してきた近代西欧というコンテクストを前提的に指標すると同時に新たなコンテクストを創出していた。

以上の分析を通して、メディア翻訳が、従来考えられてきたような、テキストを通じた事実の等価的伝達ではなく、「今・ここ」の出来事が、ミクロなレベルでは、翻訳に関わる翻訳者(編集者・ジャーナリスト)を取り巻くジャーナリズムやメディアの状況、現地からの地政学的な距離、更にマクロ

なレベルでは近代西欧・日本の支配的な価値観などといった多層的な歴史・文化・社会的コンテキストを前提的に指標することによって解釈可能なテキストとなると同時に、新たなコンテキストを創出していくという一連の記号過程、すなわち相互行為の連鎖であること、そして等価性は言及指示的なレベルよりも、むしろ社会指標的なレベルで議論されるべきものであり、そのためにはテキストだけでなくコンテキストの分析が不可欠であることを示した。第8章では、以上をまとめ、メディア翻訳の持つ相互行為性をさらに追究していくためには、メタ語用レベルでの考察が必須であることを確認した上で、本研究自体を批判的に検証した。本研究そのものが広い意味での筆者自身による解釈・翻訳の実践である限りにおいて、それは言語使用者としての筆者が置かれたマイクロ・マクロレベルでのコンテキストを指標するものである。その意味で本研究によって示唆された結果も、その妥当性をはかるためには自ら様々な視点で検証しなおすこと、また多くの他の研究者によって検証しなおされ批判されることが必要である。以上を踏まえ、最後に、異文化コミュニケーションという視点からメディア翻訳の役割と可能性を展望し本研究の結びとした。

.....

【著者紹介】

坪井睦子 (TSUBOI Mutsuko) 明治学院大学非常勤講師。専門は翻訳学。現在、メディア翻訳の相互行為性と異文化コミュニケーションにおけるその役割・課題について、社会記号論系言語人類学の視点から研究に取り組んでいる。

.....

【参考文献】(本稿の引用文献のみ)

- Bielsa, E. (2007). Translation in global news agencies. *Target*, 19(1), 135-155.
- Koyama, W. (1997). Desemanticizing pragmatics. *Journal of Pragmatics*, 28, 1-28.
- 小山亘 (2008). 『記号の系譜: 社会記号論系言語人類学の射程』三元社.
- メイ, J. L. (2005). 『批判的社会語用論入門 - 社会と文化の言語』(小山亘・訳). 三元社. [原著
Mey, J. L. (2001). *Pragmatics: An introduction* (2nd ed.). Oxford: Blackwell].
- Silverstein, M. (1976). Shifters, linguistic categories, and cultural description. In K. H. Basso & H. A. Selby (Eds.), *Meaning in anthropology* (pp. 11-55). Albuquerque, NM: University of New Mexico Press.
- Silverstein, M. (1993). Metapragmatic discourse and metapragmatic function. In A. Lucy (Ed.), *Reflexive language: Reported speech and metapragmatics* (pp. 33-58). Cambridge: Cambridge University Press.

